会計事務所経営

「中小企業のショールーム」が合言葉

見せたいのは"本業以外"

「異業種交流会を主催すれば、会の中から新規顧客が生まれるきっかけにもなりますし、事務所の宣伝にもなります。ぜひ、やらせてください」

セミナー企画チームのリーダーである宮永保寿氏が熱っぽく語る。それを黙って聞いていた所長の大石豊司氏は開口一番こう言った。

「よし、わかった。じゃあ、責任を持って、お前がやってみろ」

異業種交流会の名前は「国立ドリームパートナー異業種交流会」。回を重ねるごとに活気が増した交流会は、今年8月で11回を迎えた。毎回20名以上集まる参加者間では、異業種交流会がきっかけとなって新しい仕事に結びついているケースも珍しくないという。

実をいうと、大石会計事務所の所内の取り組みはこれだけにとどまらない。

例えば、毎朝9時から行われる「朝礼」。これは、一般にも公開されているほどの人気のもの。経営理念の共有だけでなく、お客様から褒められたことの共有や元気いっぱいの挨拶やアクティビティ、体操などが行われている。

また、毎週1回水曜日に、国立駅前で行っているボランティアでのゴミ拾いも実施。2011年で4年になる地域ぐるみの活動だ。

2011年7月1日には、福島県の南相馬市で、スタッフ10名が被災地ボランティア活動を行った。実は、これらの取り組みは、冒頭のように職員からの提案で自発的に行われている。大石氏はいつも後から参加するような格好だ。では、ぜこうした取り組みが活発なのだろうか？

率先垂範が組織を動かす

「税理士のサービスは基本的にどこも変わらない。ならば本業以外でどうやって差をつけるかがとても重要になると考えています。だから、私はいつも本業以外で何ができるのかを常に考えています」（大石氏）

大石氏の信条の一つには率先垂範がある。他人を変えたいならまず自らが変わる。自分たちが中小企業の模範となるような事務所でなければならないという共通意識を持っているという。

「だから、私たちの合言葉は事務所をショールーム化しようということなのです。見せかけだけでなく、社員の意識からお客様のお出迎えまで中小企業の模範になろうと日々努力しています」（大石氏）

実際にまず自ら動く。その効果は、顧問先だけではなく、所内にも浸透している。先のボランティアのゴミ拾いが提案された背景には、大石氏自らが毎朝トイレ掃除をしている姿を職員が見て、感じたことがきっかけになっているという。

人を動かすには、相手に対する信頼が必要になる。トップ自らが率先して模範になることで、何も言わずともスタッフがトップに従っていく。そうした自然な形の結束が大石会計事務所には存在している。

税理士法人大石会計事務所
（東京都国立市）
1989年開業。代表社員税理士は大石豊司氏。国立市内を中心に地域密着のサービスで活動する。2011年9月現在、職員数は21名。

★★★
第15回
三ツ星認定！事務所ツール
大石会計事務所から
いただきました！

今回いただいたのは大石会計事務所メンバーの自己紹介カードです。

大石会計事務所には、応接室にスタッフの自己紹介を兼ねたアルバムがある（写真左上）。待ち時間に、事務所の取り組みやスタッフの素顔が見られるようになっています。これも女性スタッフが自主的に作成した、手作りのツールです。こうしたツールがあれば、事務所の魅力や思い、信条、理念、雰囲気を自然な形でアピールすることができます。今回は大石会計事務所で使われている自己紹介カードのフォーマットをいただきました。